

レファレンス・コーナー -- インドネシア日本占領 期関連文献（ブックシェルフ）

著者	高橋 宗生
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	132
ページ	51-51
発行年	2006-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005412

レファレンス コーナー インドネシア日本 占領期関連文献

高橋宗生

アジア経済研究所図書館は、日本軍がインドネシアで軍政統治を行った時期（一九四二～四五年）に関連する資料をマイクロフィルムで多数保存しており、最近ホームページでもその大部分をデジタル化して公開した。これは「岸幸一資料」と呼ばれるコレクションに含まれ、特にその大きな部分を占める南方軍政関係資料は、同時期を研究対象とする人々にとって不可欠の資料となっている。その詳細は、末広昭編「岸幸一資料目録」『アジア経済資料月報』第一七巻第二号（一九七五年二月号）を参照されたい。

さて、国内外で関連資料の多くが散逸した状況にあっても、同時期を対象とする研究は一九七〇年代以降活発化していった。一九九〇年代半ばには、その間蓄積された研究成果に加えて、戦中・戦後の記録・回想録、戦友会会報誌および残留日本人団体誌の報告、防衛庁防衛研究

所戦史部所蔵資料、など一七四九点を収めた、インドネシア日本占領期史料フォーラム編『インドネシア日本占領期文献目録（龍溪書舎 一九九六年）』が出版された。これによって、戦後五十年目までの主要な資料や研究成果を一覧することが可能になった。

それから一〇年が経過し、同時期に関連する文献はさらに増加した。当研究所図書館の蔵書からいくつか紹介したい。

まず、インドネシア独立戦争（一九四五～四九年）に参加した残留日本人の会である「福祉友の会」(Yayasan Warga Peshadatan)の会員の足跡を写真と取材で追った、長洋弘（写真と文）『戦争とインドネシア残留日本兵』（章の根出版会 一九九七年）がある。「母と子でみる三八」とシリーズ名が付されているとおり、簡明な文章でわかりやすく、読む者の胸を打つモノクロ写真が多数収録されている。福祉友の会の会報誌は一九九八年に二〇〇号で最終号を迎え、福祉友の会編『インドネシア独立戦争に参加した「帰らなかつた日本兵」、一千名の声―福祉友の会・二〇〇号「月報」抜粋集』（VMP、福祉友の会 二〇〇五年）が掲載記事を主題別に整理した抜粋集として発行された。これは残留日本人関連の大部（A4版四〇〇ページ）の資料集といえる。

占領期の教育政策に関しては、現在も関心が集まっており、元海軍司

政官鈴木政平文教課長の書簡を整理・編集した、鈴木政平著『日本占領下バリ島からの報告―東南アジアでの教育政策』（草思社 一九九九年）と、百瀬侑子著「知っておきたい戦争の歴史―日本占領下インドネシアの教育」（つくば舎 二〇〇三年）が出版された。前者は現地の教育行政を主導した日本人の思索の跡が克明に記録されており、同時期の日本人の教育観を知る上で貴重な資料といえる。後者は日本語教育、皇民化教育、宣撫工作メディアなどの実態を一次資料と聞き取り調査を中心に解明した研究書である。

日本軍によるオランダ人抑留者に対する処遇は過酷を極めたといわれ、遺恨を繰った多くのオランダ語回想録が出版されてきた。そのなかで、オランダ人による過度の日本への非難を諷めた評論集Koubrak Rudy, Het Oostindisch kampsyndroom (Amsterdam, Meulenhof, 1992) の抜粋翻訳書、近藤紀子訳『西欧の植民地喪失と日本―オランダ領東インドの消滅と日本軍抑留所』（章思社 一九九八年）が出版された。また、オランダ人抑留者、抑留者収容所所長、日本国内の収容所所長の足跡をそれぞれ手記や聞き取り調査などとおして辿った、林えいだい著『インドネシアの記憶―オランダ人強制収容所』（燦葉出版社 二〇〇〇年）が出版されている。

インドネシアに対する戦後賠償は一九五八年に賠償協定が締結され、

七〇年まで二二年かけて支払われた。一方で、非人道的扱いを受けた人々が日本政府に対し新たな補償を要求している。「アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ、心に刻む集会」実行委員会編『インドネシア侵略と独立』（東方出版 二〇〇〇年）には、泰緬鉄道元「ロームシャ」、抗日蜂起指導者遺族「元日本軍」慰安婦」など、その代表たちの体験談が収録されている。

森本武志編著『在ジャワ日本軍の兵器の行方―第十六軍とインドネシアの独立』（鳳書房 二〇〇〇年）は、終戦後の武装解除過程で日本軍が所持した武器の少なくとも三分の二がインドネシア側に渡ったと推定する。この一〇年、東南アジアにおける日本占領期の地域間比較研究も進展し、倉沢愛子編『東南アジア史のなかの日本占領』（早稲田大学出版部 一九九七年）や、後藤乾一責任編集『国民国家形成の時代』（岩波講座 東南アジア史第八巻）（岩波書店 二〇〇二年）などが出版された。最近ではジェンダー、エスニシティ、戦争の記憶や語り、などの新しい概念や方法論を用いた研究も現れ、様々な角度からアジア・太平洋戦争を捉えなおす動きがみられる。『岩波講座アジア・太平洋戦争』（岩波書店 二〇〇五―〇六年）の全八巻には、その最新の研究成果が収録されている。

（たかはし むねお／アジア経済研究所研究支援部）